

プラテュス πλατύς

No.
32

巻頭言

Health Sciences in Uncharted Territory: How Should We Confront Evolving Threats? 01

創成看護学分野 教授 田高 悦子

北大を離れるにあたって

基盤看護学分野 教授 尾崎 倫孝 / 創成看護学分野 准教授 平野 美千代 / データヘルスイノベーション分野(寄附分野) 特任准教授 鈴木 哲平 / 高次脳機能創発分野(寄附分野) 特任助教 高倉 祐樹

新任教員紹介

創成看護学分野 助教 河嶋 亜衣

同窓会だより③

同窓会の変遷 北大保健同窓会 副会長 藤本 和則

協定締結・海外だより・国際交流

第6回保健科学研究院国際シンポジウム報告

国際連携室 室長 山内 太郎

さくらサイエンスプログラム「女性医学・看護学とリハビリテーション科学における協働の加速～人生100年時代のウィメンズヘルスを増進するために～」開催報告

創成看護学分野 教授 蝦名 康彦

特集

① 保健科学研究院公開講座
「ようこそ!ヘルスサイエンスの世界へ」を開催
公開講座委員会 委員長 山内 太郎

② 「ひらめき☆ときめきサイエンス-ようこそ不思議な細菌の世界2023-身の周りの細菌を増やして見て感じてみよう!」
(2023年12月3日開催) 実施報告
病態解析学分野 教授 山口 博之

③ 令和5年度 北海道大学医学部保健学科学友会
ハロウィン&クリスマス会の実施報告
医用生体理工学分野 講師 松谷 悠佑

④ 伊達広行教授追悼
北大保健チャリティ講演会～白土博樹教授を招いて～
医用生体理工学分野 教授 神島 保

研究発表

適度な湿度下では人肌に温めるだけで表面に付着した病原細菌の生存性が著しく低下することを発見
病態解析学分野 教授 山口 博之

成熟度の高い軟骨オルガノイド作製法の開発に成功
病態解析学分野 准教授 田村 彰吾

TOPICS

事業名：障害者や認知症高齢者等との協働に基づく地域共生社会モデル形成のための環境準備【通称：中庭プロジェクト】のスタート
研究院長 矢野 理香

報告事項

platys



Health Sciences in Uncharted Territory: How Should We Confront Evolving Threats?

創成看護学分野 教授 田高悦子

/ Etsuko TADAKA



At the onset of a new era in Health Sciences, the challenges we confront are unprecedented in complexity. The global landscape of health is in constant flux, presenting novel threats that demand innovative solutions. We find ourselves on a journey to explore uncharted territories, comprehend the intricacies of emerging issues, and contemplate how the field of Health Sciences can effectively address these challenges.

In recent years, a convergence of diverse factors such as demographic structures, household compositions, disease patterns, climate change, emerging infectious diseases, and socio-economic disparities has created a prime opportunity to test the resilience of healthcare systems worldwide. As an academic community within Health Sciences, it is imperative to critically examine the current state of affairs and propose collaborative defense strategies against these evolving threats.

In the exploration of these unknown realms, the importance of cooperation and information sharing becomes self-evident. Contemporary challenges in Health Sciences stimulate dialogue among researchers, practitioners, and policymakers. Can experts

in Health Sciences simply be observers? The answer is a resounding no. We are entrusted as pioneers with the well-being of communities and populations. To truly make an impact, we must embrace the willingness to innovate, adapt, and challenge existing paradigms.

Public health stands at an unknown stage, and how we confront unprecedented challenges is under scrutiny. I assert – we must confront this. I firmly believe that Health Sciences can not only respond to predictions but also exert leadership. Anticipating the unknown, addressing situations not typically foreseen, and preparing for the unexpected are essential in constructing reliable forecasts and plans. This involves anticipating the “unthinkable,” preparing for unpredictable scenarios and remaining vigilant in situations that tend to deviate from assumptions.

In addressing this challenge, a proactive stance is required, envisioning various scenarios and implementing flexible and comprehensive measures.

Can Health Sciences boldly rise to this mission? I want to affirmatively say, yes, with confidence.

Ben Casey、Huntington's Disease そして Flash mob !

基盤看護学分野 教授 尾崎 倫孝 / Michitaka OZAKI



初めて北大に来たのは2004年10月でしたので、かれこれ20年ほど北大でお世話になったことになります。当時第一外科教授でいらした藤堂省先生からお話をいただいたのがきっかけで、医学研究科にて寄附分野「置換外科・再生医学講座」、2007年からは「分子制御外科学講座」に特任の職をいただきました。2012年から保健科学研究院に異動しましたが、ここでは“よき保健医療人”そして“新しい保健医療”を育みたいと考え、教育・研究に携わって参りました。着任後まもなく健康イノベーションセンター内に「生体分子・機能イメージング部門」を開設させていただき、ここで新たに研究を立ち上げるための礎となりました。さらに、2016年からは寄附分野「生体応答制御医学分野」を開講することができ、よきスタッフと共に自由闊達に研究をさせていただきました。

これまで、臨床医そして臨床の視点に立つ研究者として学部・大学院教育と研究に携わらせていただきましたが、保健領域における教育・研究において私なりに少しユニークな視点から貢献できたかなと思っています。若い方々にそれらをあまり継承できなかったことは私の至らなさによるもので、退職にあたり大変残念に思っています。

研究に関して。大学院時代からこれまで自らピペットを握り実験し論文として著せたこと、また斯界に多少なりとも貢献できたことを幸せに思っています。

大した能力もない私に研究の興味を抱かせてくれたのは、幼いころよく見ていたテレビドラマ「Ben Casey」の主人公への憧れです。有能で人間味あふれる脳外科医が、深夜に研究室で顕微鏡を覗いていた場面はとても印象的で今もよく覚えています。私が Johns Hopkins 大学医学部に留学したひとつの理由でもありました (Hopkins がモデルになったドラマと聞いたことがありますが、

実際よく似た雰囲気・環境であったと思っています)。

また、1993年に発表された Huntington 病責任遺伝子解明の背景にあったエピソードは、研究する姿勢を私に啓示してくれました。個々の研究者が compete しそれまでなかなか解明できなかった病因を、collaborate することを選びすみやかに解明したというものでした (当時大きく報道されましたが、多数の研究者が笑顔で一同に会した写真はとても印象的でした)。困難な研究課題に対して研究者はどのような考え・態度で臨み研究を進めるべきか、“誰がするか”ではなく“何をするか”、また“数”ではなく“質”を大切にしなければいけないということ、また若輩者であった私に気付かせてくれました。

ところで、音楽パフォーマンスに Flash mob というのがあります。これは広場などであるひとりの音楽家が演奏をしていると皆が自然に集まり共演し (おまけに、指揮者まで飛び入りすることも)、それが終わると何事もなかったかのようにすみやかに元のところに戻っていく、というものです。次から次へと現れる多様で困難な課題を解決するための研究スタイルに投影できると思っています。ある研究者がコアとなる課題を提供し、(研究分野の異同にこだわらず) 必要なピースとなる研究者・専門家が集まり相補的に協調し一体となって研究を進め、達成された後には各自の研究に戻る…。前述の Huntington 病研究のエピソードから私なりに考えた研究スタイルですが、これまでこのような考えで研究を進められ楽しめたことは、こういった研究スタイルもあながち間違った考えではなかったのかしらと思っています。

これまで、いろいろな人たちと出会えたことにより、様々な形で教育・研究に携われたことはとても運がよかったと思っています。こうした出会い、人間関係を大切に、これからも“誰が”ではなく“何をするのか・何のためにするのか”を大切にしていきたいと思えます。

プラテュスにいくつか寄稿がありますので、よろしければご笑覧ください (2012年9月号 [PDF]、2015年9月号 [PDF]、2016年12月号 [PDF]、2018年2月号 [PDF])。

創成看護学分野 准教授 **平野 美千代** / Michiyo HIRANO



このたび、令和6年3月31日をもって、北海道大学を退職することになりました。平成19年9月に助教として着任してからの日々は、私にとって非常に有意義なものでした。本学の公衆衛生看護学教育・研究の充実と発展に少しでも貢献できたならば、これはご指導、ご協力いただきました皆様のおかげと心から感謝しております。

そのなかでも、平成21年度に開設された学士課程保健師教育強化コースや、平成26年度からの修士課程

公衆衛生看護学科目群の開設に携わることができたのは、私の誇りであり、喜びです。尊敬する先生方と共に、修士課程における高度実践者の育成に向けた教育内容を追求し、カリキュラムを創り上げた経験は、教育者としてのキャリアにおいて、非常に重要な経験となりました。

北海道大学での経験は、私の人生においてかけがえないものであり、ここでの学びは計り知れません。これまでご指導いただきましたすべての方々に、深く感謝申し上げます。最後に、皆様のさらなるご活躍と保健科学研究院の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

データヘルスイノベーション分野(寄附分野) 特任准教授 **鈴木 哲平** / Teppei SUZUKI



この度、令和5年12月31日をもって北海道大学を退職することとなりました。私は令和4年12月1日からデータヘルスイノベーション分野の特任教員として、クロスアポイントメント制度によって勤務しておりました。短い期間ではありましたが、保健科学研究院の特任准教授として研究に携わらせていただきました。クロスアポイントメント制度による勤務でしたので、本所属で

ある北海道教育大学岩見沢校の教育・研究と、北大での研究活動を同時に行う日々となりましたが、非常にレベルの高い環境での研究活動に取り組むことが出来ました。大学間を連携する難しい制度を活用した勤務でしたので、特に大学事務系職員の方々には多大な御迷惑をおかけしましたが、温かくご指導、ご支援いただきました。この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

最後になりましたが、北海道大学保健学科、大学院保健科学院、保健科学研究院の益々のご発展と、皆様のご健勝、ご活躍を心よりお祈り申し上げます。

高次脳機能創発分野(寄附分野) 特任助教 **高倉 祐樹** / Yuki TAKAKURA



この度、令和5年6月30日をもって北海道大学を退職することになりました。令和元年7月より、株式会社「れんせい」からの出資で創設された寄附分野「高次脳機能創発分野」に着任し、高齢者の認知機能に関する研究を進めてまいりました。

本分野での研究が本格的にスタートする直前に、COVID-19による世界的なパンデミックが発生しました。これにより研究計画の大幅な見直しが必要となりましたが、この困難な状況は同時に大きな学びの機会でもありました。具体的には、遠隔形式での認

知機能評価法の開発や、非接触でのデータ収集が可能なIoT(Internet of Things)機器を活用した認知機能評価法の探索など、パンデミックによる制約が、結果的に研究の幅を広げるきっかけとなりました。保健科学研究院の先生方や事務系職員の皆様の温かなご指導とご支援があったからこそ、困難な状況の中においても前向きに研究に取り組むことができたと思っております。この場をお借りして、心から御礼申し上げます。

最後になりましたが、保健科学研究院のより一層のご発展と、皆様のご健康、ご活躍を心よりお祈り申し上げます。

新任教員紹介—就任のご挨拶—

創成看護学分野 助教 河嶋 亜衣 / Ai KAWASHIMA



令和6年1月1日付で、創成看護分野、助産学・母性看護学の助教として着任しました。私は自分自身の出産を機に助産師を目指し、2005年に本学看護学専攻2期生として入学しました。卒業後に助産師として勤務する中で日々湧いてくる疑問を研究で解決したいと思い、2014年

に社会人特別選抜で本学修士課程に入学、初産婦の産後入院中の睡眠と1か月までの疲労および産後うつとの関連について研究し、修了しました。その後は教育と臨床の場で勤務しておりましたが、この度、母校で教育・研究に携わる機会をいただき、大変うれしく思うと同時に身の引き締まる思いであります。本研究院に少しでも貢献できるよう努力いたします。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

同窓会
だより

③

同窓会の変遷

北大保健同窓会 副会長 藤本 和則 / Kazunori FUJIMOTO

私達の同窓会は、その歴史から正式名称が北海道大学医学部保健学科・大学院保健科学院・医療技術短期大学部同窓会と長くなっています。同窓会役員の古株として、簡単に歴史に触れたいと思います。

医療短大同窓会準備委員会が設立されたのは、平成元年のことです。各学科の設立がばらばらで5学科の卒業生3期までがそろったタイミングでした。私も委員の一人として参加しておりました。議論を交わし平成2年に北海道大学医療技術短期大学部同窓会が発足し、私は役員として参加してまいりました。

時を経て、医療短大の閉校と医学部保健学科設立が決まり、同窓会運営について難しい選択を迫られました。

- 1 医短卒業生のみで活動を続ける
- 2 保健学科卒業生を含めた同窓会とする

保健学科1期生の卒業前に結論を出すべく、双方の案について白熱した議論が繰り返されました。1の案では、新入会員がいなくなる⇒収入がなくなる⇒活動内容の縮小⇒解散?の流れが予想されました。2の案では会則の

変更が必要、そもそも医短卒と保健学科卒、同じ同窓会でいいのか?と様々な意見が飛び交う中、他大学の例等を参考にし、

第1条 本会は北海道大学医学部保健学科・医療技術短期大学部同窓会と称する。

第6条 本会は下記の会員により構成される。

- 一 正会員 ・北海道大学医学部保健学科卒業生
- ・医療技術短期大学部卒業生
- ・医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻修了者

と会則を変更し、同窓会は生まれ変わることになりました。その後教職員の先生方、院生修了の方を含め、名称・会則を変更して現在にいたります。

同窓会の歴史としてはまだ浅く、至らない点多々あるとは思いますが、皆様のご協力をいただきながら運営していく所存です。今後とも、よろしくお願いいたします。



Conference

第6回保健科学研究院国際シンポジウム報告

The 6th FHS International Conference (FHS 2023):

Re-bonding and Restarting: Unfolding a New Chapter of Health Sciences in Asia

国際連携室 室長 山内 太郎 / Taro YAMAUCHI



10月20日(金)、保健科学研究院において第6回国際シンポジウム(The 6th FHS International Conference、FHS 2023)を開催しました。保健科学研究院(Faculty of Health Sciences、FHS)が主催する国際シンポジウムは2013年から隔年開催しており、この度10周年を迎えました。新型コロナウイルス感染拡大の影響によりオンライン開催となった前回(第5回、FHS 2021)から、再び対面式に戻り、172名にご参加いただきました。

今回は、協定校の台北医学大学から Prof. Hsia-Yean Chiu*、香港大学から Prof. Chia-Chin Lin*、チュラロンコン大学から Dr. Wanida Laiwattanapaisal*、Dr. Thititip Tippayamontri、高雄医学大学から Prof. Ming-De Chen*、Dr. Shih-fen Hsiao、メルボルン大学から Dr. Marianne Coleman* を招待した他、エアランガ大学(インドネシア)から Prof. Trias Mahmudiono* をお招きし、6名に登壇いただきました(*講演者)。さらに、保健科学研究院から羅云潔特任助教、福永久典准教授、澤村大輔教授、山内太郎教授が登壇し、計10名が講演を行いました。看護学、臨床検査学、放射線医学、理学・作業療法学、健康科学、国際保健学といった広範な保健医療分野をカバーする充実したシンポジウムになりました。

講演に加えて、第2回国際シンポジウム(FHS 2015)から恒例となっている、大学院生による一人1分間の口

頭ポスター紹介「フラッシュトーク」を実施しました。1分間という短い時間に自分のポスターの内容を英語で話すのは大変ですが、とてもよい勉強になります。86題のポスター発表があり、盛況でした。

フラッシュトークに続くポスターセッションでは、大学院生は懸命に英語で自らの研究に対する質問やコメントに回答し、活発なやりとりが行われました。大学院生が国際学会に参加して発表する機会は限られていることから、本国際シンポジウムは大学院生にとって大変貴重な機会です。この貴重な経験を今後の研究活動に活かしてもらいたいと期待しています。

優秀なポスター発表を行った大学院生に贈られる「伊達賞(DATE Award)」は、紺谷一生さん(看護科学コースD3)、Jayaprakash Jayashankarさん(国際食資源学院D2)、Rachana Madihalli Gangadharaさん(国際食資源学院D1)の3名が受賞しました。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、海外からの招待講演者の皆様、座長及び発表を引き受けていただいた保健科学研究院の教員の方々、当日の運営及び準備等にご尽力いただいた国際連携室、広報室及び事務の方々、保健科学研究院長をはじめ参加いただいた教員、大学院生、学部生の皆様に感謝申し上げます。





China

さくらサイエンスプログラム「女性医学・看護学とリハビリテーション科学における協働の加速～人生100年時代のウィメンズヘルスを増進するために～」開催報告

創成看護学分野 教授 蝦名 康彦 / Yasuhiko EBINA

JST さくらサイエンスプログラムの助成を受け、2023年11月25日から12月3日までの9日間のうち5日間、中国・四川大学華西医院リハビリテーション医学センター・リハビリテーション学科と共にオンラインプログラムを開催しました。両大学から合わせて30名以上の学生・大学院生と教員が参加し、盛況のうちに終了しました。

第1日目(11月25日)の開会式では、研究院長 矢野理香教授と、四川大学華西医院リハビリテーション医学センター主任の何 成奇教授から挨拶をいただきました。矢野教授は、参加した専門家と学生への歓迎の言葉と共に、交流活動を通じて有意義な学びが得られることへの期待を述べました。開会式に引き続き、当方からプログラムについてのガイダンス、そして近藤祥子准教授、四川大学の高 強教授が両大学の紹介を行いました。その日のメインイベントである特別講演会では、両大学から計6人の専門家が講演しました。

1. Current obstetrics and gynecology care in Japan: expectation for physical therapy (北大 蝦名康彦)
2. Exercises rehabilitation after breast cancer surgery in geriatric female patients (四川大 王 妙維先生)
3. Sports physical therapy approach for women's health (北大 寒川美奈先生)
4. Evaluation treatment of female stress urinary incontinence (四川大 趙 映先生)
5. Gender and women's health: from an occupational therapy perspective (北大 高島理沙先生)
6. Cognitive rehabilitation for elderly women (四川大 張 玉婷先生)

夕方まで熱のこもった議論が続きました。各国での問題点などが詳しく提示され、協働のヒントを数多くみつけることができたと思っています。最後に保健医療教育研究センター長の鷲見尚己教授から閉会の挨拶をいただきました。

第2日目(11月26日)には、北海道大学の羅 云潔先生と、四川大学の賀 加貝先生、許 陽先生のファシリテーションで、学生同士の熱心な交流が行われました。参加者は、「医療と看護のチームワークの現状と課題」「将来の科学研究の方向性と目標」「職業計画の展望」といったテーマについてグループディスカッションを行いました。



開会式の集合写真

第3日目(12月1日)には、四川大学の許 陽先生と王 鳳怡先生、北海道大学の羅 云潔先生、そして学生たちの案内のもと、四川大学華西医院温江院区にある作業療法学ホール、理学療法ホール、中国伝統治療室、装具室をオンライン訪問しました。北大では一般学生施設およびリハビリテーション科学実験室を訪問しました。これにより、両国の環境や日常業務の違いについて理解を深めました。

第4日目(12月2日)には、共同ゼミを行い、「遠隔リハビリ」「疼痛管理」「産後リハビリ」「更年期周辺女性の運動トレーニング」「健康教育の普及」といったトピックについて活発な討論を行いました。寒川美奈准教授、羅 云潔先生、四川大学の賀 加貝先生から数多くのコメントをいただきました。

そして最終日(12月3日)には、グループディスカッションの成果をもとに、グループ発表会を行いました。学生たちは3グループに分かれて、「日本と中国における看護学とリハビリテーション学の大学教育」「キャリア形成」「多職種連携」について発表しました。その後の閉会式では、四川大学の高 強教授と当方が閉会の辞を述べました。

今回の企画と運営のほとんどを、特任助教の羅 云潔先生が担当しました。そして、リハビリテーション科学分野の寒川美奈先生、高島理沙先生、看護学専攻の先生方に多大なる協力をいただきました。あらためて心から感謝申し上げます。また、本学修了生である四川大学の賀 加貝先生と羅先生との連携がなければ、この開催は不可能でした。

オンラインでの開催でしたが、予想を大幅に超える活発なプログラムとなりました。このイベントが、両大学の教員と学生間の今後の交流と協力をさらに深める契機となることを期待します。

保健科学研究院公開講座 「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」を開催

公開講座委員会 委員長 山内 太郎 / Taro YAMAUCHI

特集

1

保

保健科学研究院では毎年11月3日（文化の日）に、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、公開講座を開催しています。本年度も3名の講師陣が各々専門とする研究をわかりやすく紹介しました。振り返れば、感染症パンデミックのため2020年度、2021年度はオンラインおよびハイブリッド形式で実施しましたが、2022年度より対面式に戻しました。2023年度は、40名の方にご参加いただき、盛会のうちに終えることができました。

はじめに、松谷悠佑講師が「ミクロな視点で放射線を分析！」と題して、放射線が物質の中で起こす反応、私たちの体に入った場合の生体影響、ミクロな解析で解明を挑む最新の知見や今後の課題等を交えながら講演しました。



松谷悠佑講師による講演の様子

続いて、鷺見尚己教授が「安心して病院を退院する・通院するために」と題して、安心して退院後の療養生活を送るために、住み慣れた地域を中心とした包括的な支援・サービス提供体制の構築について、当事者としての考えを持ち患者と医療者が協力して意思決定や情報共有を行うプロセスの大切さなどを講演しました。



講演を聴く参加者のみなさん



鷺見尚己教授による講演の様子

最後に、澤村大輔教授が「脳を知り、脳を守るーリハビリテーションの立場からの予防と治療のヘルスプロモーションー」と題して、認知症における脳の働きや症状、ヘルスプロモーションの中での改善、予防への意識を紹介し、会場で実際に参加者へ認知機能検査を行うなど分かりやすく講演しました。



澤村大輔教授による講演の様子

終了後のアンケートでは、勉強になった、分かりやすかった、もっと聞きたかった等々の感想をいただき、参加者の皆様から大変好評を博することができました。

保健科学研究院の公式YouTubeチャンネルで、2021年度、2022年度、そして今年度（2023年度）の講演を一部公開しています。ご覧いただけますと嬉しいです。
<https://www.youtube.com/playlist?list=PL83W9K0RKbntjVCoHNiKIBTH3PCSAtC3j>

今後も、時代を反映するようなテーマや、興味を持って参加いただけるようなテーマを設けて、公開講座を開催して参ります。動画の感想や、ご関心があるテーマなどお寄せください。

「ひらめき☆ときめきサイエンス – ようこそ不思議な細菌の世界 2023 – 身の周りの細菌を増やして見て感じてみよう！」（2023年12月3日開催） 実施報告

病態解析学分野 教授 山口 博之 / Hiroyuki YAMAGUCHI

特集

2

「ひらめき☆ときめきサイエンス – ようこそ不思議な細菌の世界 2023 – 身の周りの細菌を増やして見て感じてみよう！」（募集人数 20 名）を 2023 年 12 月 3 日に保健科学研究院にて実施しました。今年度の参加者は 16 名（当日欠席者 4 名）。2 名の教諭も実施プログラムに高校生と一緒に参加しました。また保護者 1 名が見学参加しました。冒頭の双方向型の講演（「ようこそ不思議な細菌の世界へ – 身の周りに生きる細菌達の生存戦略 –」）では、科研費研究成果を含めて身の回りに無数に存在する細菌の生存様式や特徴について紹介し、プログラムで実施するグラム染色の染色性の違いと細胞の壁構造や細菌進化との関連性について一緒に考えてもらいました。講義終了後は、同教室にて昼食弁当を食べました。その際、大学院生との懇談の場を設けると共にオンラインで事前に録画した本学科微生物授業を視聴してもらい大学で実施されている講義の一端を垣間見てもらいました。



昼食後は、実習室に移動し、感染予防措置についての説明を行った上で使い捨ての防護着を着用。実験を行う際には、大学院生に実施協力者として参加してもらうことで、参加者が院生から大学生活について聞く機会を設けました。1 時間に 1 回程度の休憩（クッキータイム）を設定しました。細菌培養には時間を要するので、培地は事前に参加者に送付しサンプリング後返送してもらい培養後、プログラム実施日に使用できるようしました。各自染色した標本より細菌のバーストショットをスマートフォンで撮影してもらい、また専用の顕微鏡写真撮影装置を用いて撮影した高解像度の顕微鏡画像を USB に保存し参加者各自に持ち帰ってもらいました。さらに細菌の形態やグラム染色性の違いからは、細菌の菌体構造や進化についても楽しく考えてもらうことで、科学を探究する楽しさと醍醐味の一端を存分に味わってもらいました。その後、多目的室（講義室）に移動し、「感激体験発表会」と称して各自プログラムに参加した感想を 1 分間程度にまとめ発表してもらい、その後未来博士号の証書を受け取り無事終了しました。

初回開催時の参加者は僅か 4 名でした。参加者を募るためにも高校教諭との連携がいかに重要かを改めて痛感しました。1 回あたりの参加者数は限られているので大変地道な取り組みですが、回数を重ねることで大きなうねりに繋がると確信しています。今後は研究室を飛び出し、連携高校での出前研究室紹介等、大勢の高校生に直接問いかける機会を一層増やし、より魅力的なプログラムへと深化させていきたいと考えています。また円滑なプログラム遂行のためにも、部局事務との密な連携が必要不可欠であり、「若い世代に対してどのようにしたらサイエンスへの興味を惹起できるか」という命題に対して、歩調を合わせ、部局単位でのイベントとして、一丸と成って取り組めるような環境づくりが必要であると感じました。

最後に、実施プログラムをサポートしていただいた大久保講師と大学院生（李さん、張くん、栗城さん、黒岩くん）の皆さんに深く感謝します。

令和5年度 北海道大学医学部保健学科学友会 ハロウィン&クリスマス会の実施報告

Report on the the Halloween & Christmas Party Held by a Students' Association of the Department of Health Sciences at Hokkaido University in 2023

医用生体理工学分野 講師 松谷悠佑 / Yusuke MATSUYA

特集

3

医

学部保健学科学友会は、学生の教養と健康の向上に資し、相互の親睦を図ることを目的とし、本学保健学科に設置されています。保健学科学友会は、過去に綱引き大会やジンパ、クリスマス会等の様々なイベントを行ってきました。しかし、2020年3月に成立した新型コロナウイルス対策の特別措置法「緊急事態宣言」以降、本学友会による対面でのイベントは実施できない状況が続いていました。本年度、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行し、対面でのイベントも徐々に開催できるようになってきました。そのような中で、令和5年度12月22日(金)、当保健学科の学部生や教員の親睦を深める目的で、保健学科学友会が主体となり「令和5年度 保健学科学友会 ハロウィン&クリスマス会」を開催しました(図1参照)。

学友会における当初の予定では、10月下旬にハロウィンパーティとして本会の開催を企画していました。しかしながら、本年度の10~11月において、新型インフルエンザならびに新型コロナ感染者数が再度増加する傾向を受け、本保健学科の講義や実習への影響を最小限に抑えるべく、12月下旬の開催へと変更しました。そのような事情より、本会は、これまでの学友会イベントの企画と異なる新たな試みとして、ハロウィン仮装ありのクリスマス会「ハロウィン&クリスマス会」とし、本保健学科2学年生の学友会学生代表が主となり、企画・運営を進めました。「ハロウィン&クリスマス会」の当日は、ケー

タリングによる軽食や駄菓子、様々な飲み物、さらにはビンゴ大会を用意し、多くの学友会学生会員や教員の皆様にご参加いただきました。冒頭のご挨拶の際には、矢野研究院長よりご挨拶いただき、大学と地域の高齢者、障害者などの



図1 ハロウィン&クリスマス会の様子①

みなさまとのコミュニティの場として保健学科の開拓を進める企画である「中庭プロジェクト」についてご説明があり、保健学科は学生や地域医療の活性の場になり得ることを知り、学部生にとって大変良い刺激となりました(図2参照)。また、現在の学部在学学生はコロナ禍中に学生生活を送っており、対面でのイベントは少なかった経緯がありました。本会が学生にとって良い思い出になったと感じています。

次年度以降も保健学科学友会のイベントは継続する予定です。学生主体による企画や活動を進めることにより、医療現場における次世代のリーダー育成や、保健学科のみならず北海道における医療の将来の発展につながることを、学友会一同心より願っています。



図2 ハロウィン&クリスマス会の様子②

伊達広行教授追悼 北大保健チャリティ講演会～白土博樹教授を招いて～

医用生理工学分野 教授 神島 保 / Tamotsu KAMISHIMA

特集

4

2

2022年の夏、長きに渡り北大保健の礎を築かれた伊達広行研究院長が、現職のまま急逝されました。伊達先生は将来の医療従事者の健やかな成長と保健科学研究の発展を誰よりも大切にしておられました。その精神を受け継ぐべく、伊達先生のお名前を冠した基金を創設し、チャリティ講演会を開催する運びとなりました。講師は長きに渡り伊達広行先生と共同研究を進めてこられた白土博樹先生（北海道大学大学院医学研究院 教授）に依頼、2024年2月8日(木)にオンラインで開催されました。

18時にライブ配信を開始、矢野理香研究院長からご挨拶と本企画開催に関する経緯のご説明があり、司会（神島）が白土先生のご略歴をご紹介、講演が始まりました。冒頭、「伊達先生が、突然お亡くなりになり、信じられない気持ちでした。今回、追悼講演のお話を頂き、私は伊達先生のほんの一部しか存じ上げず、自分が相応しいかどうか不安でしたが、伊達先生への感謝を込めて、お引き受けしました。私の研究内容の紹介をさせて頂けるとのことですので、この機会に、自分の研究に関して、伊達先生にお会いする前と、お会いしてからのことを、振り返ってみました。」とご挨拶をいただきました。

2003年に伊達先生が白土先生のところに教授就任の挨拶に来られたのが初対面で、伊達先生は、将来展望として、多部局横断研究や動体追跡陽子線治療の開発を熱く語っていらしたとのこと。白土先生は、相槌を打ちなが

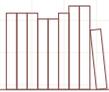
らも、夢物語と聞いていらしたそうです。ところが、現在までに大型研究費を次々に獲得され、夢がすべて実現したのです。

講演の終盤で、白土先生は、伊達先生が何かを訥々と語る時に、純粹な「情熱」や「正義感」など「志」的なものが言葉に漂い、非常に印象に残ったそうです。伊達先生の発した「言葉」が歴史を動かし、伊達先生の「大志」に基づく言葉（人としてあるべき、あらゆることを成し遂げるために、大志を抱け！）は、我々がどう進むべきかを示し、周りの我々は、無意識のうちに、その道に沿って行動していたと感じておられるとのことでした。最後に、寶金清博総長からの追悼コメントをご紹介いただいた上で、白土先生から伊達先生への感謝の言葉で講演を終了されました。

講演終了後、参加者との質疑応答の中で、異分野横断の困難さに関し言及され、成功率は極めて低く、単なるshake handsの連携ではなく、重要なテーマ設定をもとにした、真の意味での異分野横断研究の必要性を説いておられました。若手研究者のみならず、全ての研究者の心を打つ内容のコメントであり、今後の白土先生と保健科学研究院の研究者との交流への発展も大いに期待される講演会となりました。

ご参加いただいた皆様、同窓会並びに本講演会の開催にあたりご協力いただいた関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。





適度な湿度下では人肌に温めるだけで表面に付着した病原細菌の生存性が著しく低下することを発見

病態解析学分野 教授 山口 博之 / Hiroyuki YAMAGUCHI

▶▶ 北大プレスリリース [PDF]

論文情報

PLOS ONE 2023年 18(9): e0291765

Human pathogenic bacteria on high-touch dry surfaces can be controlled by warming to human-skin temperature under moderate humidity

Ayano Konno^a, Torahiko Okubo^a, Yoshiaki Enoeda^a, Tomoko Uno^b, Toyotaka Sato^c, Shin-ichi Yokota^c, Rika Yano^d, Hiroyuki Yamaguchi^{a*}

^a Faculty of Health Sciences, Department of Medical Laboratory Science, Hokkaido University, Sapporo, Japan

^b Department of Nursing, Sapporo Medical University School of Medicine, Sapporo, Japan

^c Department of Microbiology, Sapporo Medical University School of Medicine, Sapporo, Japan

^d Faculty of Health Sciences, Department of Fundamental Nursing, Hokkaido University, Sapporo, Japan

*Corresponding Author

DOI : [10.1371/journal.pone.0291765](https://doi.org/10.1371/journal.pone.0291765)

研究成果のポイント

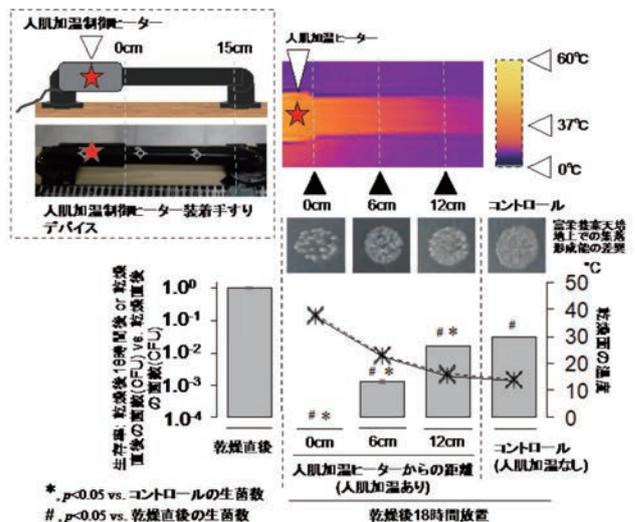
人の営みは、多剤耐性菌等の病原体を公共環境に持ち込み、その拡散に影響を与えています。そのため、病院や公共環境の乾燥した高頻度接触面に付着した耐性菌の伝播循環を未然に防ぐための研究は活発です。しかし、その研究の主流は消毒剤等の化学物質による殺滅除去に関わる方法で、耐性菌の拡散を制御する決め手とはなっておらず、新しい発想に基づく制御法が求められています。

その一方で本研究グループは、様々な環境微生物の生態の観察研究から、これら耐性菌も人と同じく地球上の生命体であり、殺滅し取り除くのではなく、普遍的な環境因子の調節によって、折り合いをつけ共存できるのではないかと考えました。具体的には、人を害さない僅かな環境温度の変化でも、病原体か否かに関わらずその場の微生物の営みに大きな影響を与えるので、院内感染の温床となる病院内の高頻度接触面を人肌に加温するだけで、病原体の伝播を制御できるのでは、という仮説です。

その結果、湿度が低く相対的に温度も低い院内環境では、そうでない環境に比べ高頻度接触面の細菌数が有意に高いことを発見しました。また実験的に人肌(37°C)に温めた手すり上では、大腸菌やブドウ球菌等、ヒトに感染症を引き起こすリスクのある病原体の生存性が有意に低下することを発見しました(図)。さらに、それに付随

するメカニズムとして NhaA というナトリウムとプロトンの交換輸送体が乾燥面での大腸菌の生存性を規定する因子の一つであることを突き止めました。

この結果の応用として、乾燥面の病原体を制御するための化学物質に代わる、全く新しい概念に基づく感染制御法の開発が期待されます。



人肌加温制御ヒーター装着手すりデバイス上で乾燥させた大腸菌の生存性を示す実験結果を示した図。加温した手すりデバイス上では、人肌温度に暖められた手すり部分での大腸菌生菌数が、コントロールやより温度が低い部位に比べ有意に低下した。この実験は、湿度55%で温度15°Cに保たれた恒温恒湿機庫内で実施した。赤色星印は人肌加温制御部を、ヒートマップはデバイス上の温度をサーモグラフィーで可視化した結果をそれぞれ示す。加温制御部のヒーターは、市販のバイクハンドヒーターを用いた。



成熟度の高い軟骨オルガノイド作製法の開発に成功

病態解析学分野 准教授 田村 彰吾 / Shogo TAMURA

▶ 北大プレスリリース [PDF]

論文情報

Biochemical and Biophysical Research Communications 2024年 Vol.701: 149583

Basement membrane extract potentiates the endochondral ossification phenotype of bone marrow-derived mesenchymal stem cell-based cartilage organoids

Hinako Notoh^a, Satoshi Yamasaki^a, Nobuaki Suzuki^b, Atsuo Suzuki^c, Shuichi Okamoto^d, Takeshi Kanematsu^e, Naruko Suzuki^f, Akira Katsumi^g, Tetsuhito Kojima^{d,h}, Tadashi Matsushita^{b,e}, Shogo Tamura^{b,i,*}

a Graduate School of Health Sciences, Hokkaido University, Sapporo, Japan / b Department of Transfusion Medicine, Nagoya University Hospital, Nagoya, Japan / c Department of Medical Technique, Nagoya University Hospital, Japan / d Department of Integrated Health Sciences, Nagoya University Graduate School of Medicine, Nagoya, Japan / e Department of Clinical Laboratory, Nagoya University Hospital, Nagoya, Japan / f Department of Hematology and Oncology, Nagoya University Graduate School of Medicine, Nagoya, Japan / g Department of Hematology, National Center for Geriatrics and Gerontology, Obu City, Japan / h Aichi Health Promotion Foundation, Nagoya, Japan / i Department of Clinical Laboratory Science, Faculty of Health Sciences, Hokkaido University, Sapporo, Japan

*Corresponding Author

DOI : [10.1016/j.bbrc.2024.149583](https://doi.org/10.1016/j.bbrc.2024.149583)

研究成果のポイント

軟 骨は骨と骨髄の発達に不可欠な組織です。大腿骨のような長管骨は、内軟骨性骨化と呼ばれる多段階の過程を経て形成されます。

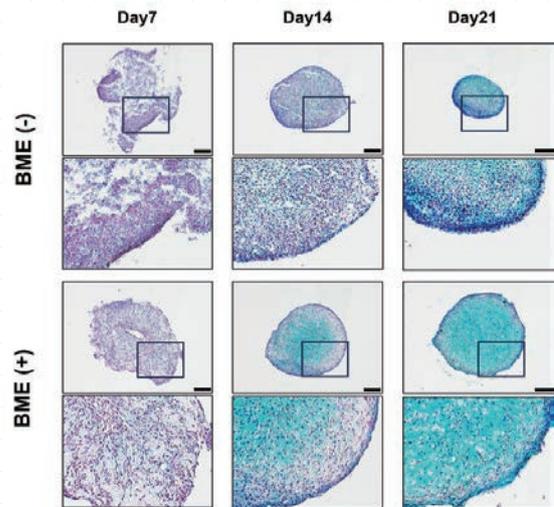
細胞培養により内軟骨性骨化を再現することは、骨格や骨髄の発生・再生に関する研究の有用なツールとして応用が期待できます。しかし、内軟骨性骨化を細胞培養で再現するためには、幹細胞分化誘導性軟骨(人工軟骨、軟骨オルガノイド)を用い、完全に分化/成熟した軟骨テンプレートを作製する必要があります。そこで本研究グループは、内軟骨性骨化に適した幹細胞分化誘導性軟骨テンプレートを得るために、従来の軟骨オルガノイド作製法の改良を試み、今回、基底膜抽出混合物(basement membrane extract、BME)を混和して軟骨オルガノイドを作製する方法を考案し、その内軟骨性骨化の特性を評価しました。

研究手法として、軟骨細胞への分化能を有するヒト骨髄間葉系幹細胞を試料とし、細胞凝集分化誘導法により3次元軟骨分化誘導を21日間行いました。分化誘導開始時の細胞凝集塊にBMEを混和し、その形態や分化・成熟度をBME非混和軟骨オルガノイドと比較しました。

21日間の分化培養において、BME混和軟骨オルガノイドはBME非混和軟骨オルガノイドに比べて大型化することが分かりました。さらに、分化誘導完了時である21日目では、BME混和軟骨オルガノイドは軟骨

分化(Cartilage development)に加えて骨格系の分化(Skeletal system development)と骨化(Ossification)に関わる遺伝子群の発現増強が認められました。

本研究成果は軟骨、骨、骨髄が形成されるメカニズムを解明する手がかりになるとともに、これらの臓器・組織に関わる疾患の病態解明や創薬研究への応用、さらには再生医療マテリアルとしての発展が期待されます。



分化誘導7、14、21日目のBME混和及び非混和軟骨オルガノイドの薄切片を作製し、軟骨特異的染色であるAlcian Blue染色で解析した結果、BME混和軟骨オルガノイドはより早期に軟骨の特徴を発現することが分かった。Alcian blueは軟骨組織内の酸性ムコ多糖類を青色に染色する(青色の染色領域は軟骨であることを示す)。各画像のスケールバーは200µmを示す。

事業名

「障害者や認知症高齢者等との協働に基づく地域共生社会モデル形成のための環境準備」

通称：中庭プロジェクト のスタート

研究院長 矢野 理香 / Rika YANO

令和5年度部局評価配分事業「各部局の強み・特色に対する評価」において、保健科学研究院の「障害者や認知症高齢者等との協働に基づく地域共生社会モデル形成のための環境準備」（通称：中庭プロジェクト）が採択されました。この配分事業は、各部局の強み・特色を明確にし、新たな強み・特色を開拓する取組を評価の上、配分されたスタートアップ経費です。

昨今、多様な人びとが活躍できる社会参加の場を創出することで、自己実現の促進や社会的つながりの形成、多様性を尊重する社会への理解が促進されることが期待されています。本研究院は、5つの医療専門職を養成し、各スペシャリストが所属する部局です。障害者や高齢者、認知症の方々のパフォーマンスを専門的に査定し、それぞれの強みを生かした活動支援ができるのは、保健科学研究院であるからこそできる活動です。ぜひとも、新たな社会共生のモデルケースを保健科学研究院で創り上げたいと考えました。

ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、これまでの保健科学研究院の中庭は、全く手入れができておらず、雑草やフキなどがどんどん成長し、大変残念な状況でした。そこで、中庭の改修を題材として、多様な人びとと教員、学生がともに協働する【地域共生社会アンビシャスモデル事業プロジェクト】を立ち上げ、参加者の能力を最大限、心地よく発揮できる場と機会を提供することを基本とした共同作業を推進していきたいと考えました。

中庭づくりを中心として、障害者および高齢者の方々の所属施設や学内の他部局とも連携しながら、本事業を推進し、地域共生社会のモデル事業として提案していきたいと考えています。また、本事業に学生たちが参加し、多様な人々と交流することによって、学生個々のコミュニケーション能力の育成にもつながるのではないかと期待しています。さらに、学生や教職員など参加者自身の健康面でのポジティブな影響も考えられ、この活動をアクションリサーチ研究の場としても活用し、その効果測定を計画していきたいと考えています。最終的には、このプロジェクトが、地域課題解決と研究および教育の好循環を創出する機会となることを目標としていきたいと思っています。

令和5年度は、中庭プロジェクト事業の準備期間とし、令和6年度から本格始動いたします。新たに博士研究員と事務補佐員の各1名にもプロジェクトに加わっていただきます。

私たち自身もわくわくしながら、頭を使い、汗を流して活動をしていきますので、今年の夏頃には、中庭がどのような変化を遂げていくのか、楽しみにしていただければと思います。なお、中庭の作業工程などは随時ホームページやSNSなどを通じてお知らせしていきたいと思っています。この活動に参加してみたいと思う方がいらっしゃいましたら、ぜひお問い合わせください。

報告事項

令和5年度北海道大学医学部保健学科卒業研究優秀賞表彰者を決定

この表彰は、医学部保健学科4年次に在籍する学生で、保健科学における新しい研究課題を積極的に開拓し、優れた卒業研究を行った個人へ授与されるものです。このたび下記の方々が表彰者と決定されました。

専攻	氏名
看護学専攻	柳本 麻衣子
看護学専攻	原山 桃佳
看護学専攻	石綿 桃果
看護学専攻	高橋 希実
放射線技術科学専攻	宇野 陽翔
放射線技術科学専攻	高木 天
検査技術科学専攻	齋藤 梨乃
検査技術科学専攻	奈良 陸斗
理学療法学専攻	高井 彩衣
作業療法学専攻	中野 世那

保健科学研究院共催等イベントの実施状況（令和5年11月～令和6年2月）

イベント名	開催日	分類	保健科学研究院以外の主催・共催等組織
第5回血管炎病因病態研究会	2024.2.17	協力	血管炎病因病態研究会

保健科学セミナーの実施状況（令和5年11月～令和6年2月）

	開催日	講演タイトル	講師
2023年度 第5回*	2023.12.8	海外に目を向ける	大澤みずほ氏 (日本国際ボランティアセンター (JVC))
第6回**	2024.2.17	骨髄及び胸腺での神経堤細胞の寄与とその機能	山崎英俊 教授 (三重大学大学院医学系研究科 幹細胞発生学)

*国際保健学の講義を公開 **第5回血管炎病因病態研究会の特別講演を公開

FD研修の実施状況（令和5年11月～令和6年2月）

開催日	区分	講演内容	講師
2023.11.16	全校	北海道大学のSDGs達成への取り組みと教育研究活動	北海道大学サステナビリティ推進機構 SDGs事業推進本部 横田 篤 本部長（北海道大学理事・副学長） 北海道大学大学院先端生命科学研究院 出村 誠 教授（北海道大学総長補佐）

保健科学研究院研究推進対象論文対象者（令和5年10月～令和6年2月）

所属分野	職名	氏名	備考
基盤看護学分野	教授	矢野 理香	2編
基盤看護学分野	助教	大橋 和貴	1編（内20%以内1編）
医用生体理工学分野	教授	神島 保	1編
医用生体理工学分野	准教授	杉森 博行	5編
医用生体理工学分野	准教授	福永 久典	3編
医用生体理工学分野	講師	松谷 悠佑	1編
医用生体理工学分野	助教	堤 香織	1編
医用生体理工学分野	助教	仲本 宗泰	1編
病態解析学分野	教授	恵 淑萍	5編（内20%以内1編、10%以内1編）
病態解析学分野	教授	石津 明洋	2編（内20%以内1編）
病態解析学分野	助教	Eddy Dya Fita Dibwe	1編
リハビリテーション科学分野	教授	千見寺 貴子	1編（内10%以内1編）
リハビリテーション科学分野	准教授	寒川 美奈	3編
リハビリテーション科学分野	講師	吉田 一生	1編
リハビリテーション科学分野	講師	石田 知也	3編（内20%以内1編）
リハビリテーション科学分野	助教	笠原 敏史	2編
リハビリテーション科学分野	助教	岡田 宏基	1編
リハビリテーション科学分野	助教	越野 裕太	3編（内20%以内1編）
健康科学分野	教授	横澤 宏一	2編
健康科学分野	教授	小笠原 克彦	1編（内20%以内1編）
健康科学分野	教授	山内 太郎	3編
健康科学分野	教授	池田 敦子	1編（内10%以内1編）
健康科学分野	准教授	Bomme Gowda Siddabasave Gowda	6編（内20%以内2編、10%以内1編）
健康科学分野	助教	吉村 高明	1編

【研究推進対象論文】

- 対象：(1) 英文原著論文（査読有、IF有、first author）を執筆した教員
 (2) 英文原著論文（査読有、IF有）の corresponding author となった教員
 ※ ただし、(1)に該当する論文の corresponding author となった教員は除く

研究助成採択状況（令和5年3月～令和6年2月）

所属・職名・氏名	団体	名称	題目
基盤看護学分野 准教授 大槻 美佳	公益財団法人 伊藤医薬学術交流財団	海外学会等出席研究交流 助成	第28回認知神経科学会
医用生体理工学分野 准教授 福永 久典	公益財団法人 武田科学振興財団	2023年度医学系研究助成	男性の妊孕性温存を可能とするマイクロ ビーム放射線治療法の開発
病態解析学分野 教授 石津 明洋	公益財団法人 伊藤医薬学術交流財団	学会等助成	第5回血管炎病因病態研究会
病態解析学分野 教授 恵 淑萍	公益財団法人 ノーステック財団	2023年度イノベーション 創出研究支援事業	道産トマト由来トマチジン高含有抽出物 のサルコペニア予防素材の創出
病態解析学分野 准教授 田村 彰吾	公益財団法人 ノーステック財団	2023年度若手研究人材・ ネットワーク育成補助金	血管化多臓器オルガノイドモデルを実現 する新規還流型培養デバイスの開発
病態解析学分野 助教 村山 迪史	公益財団法人 ノーステック財団	2023年度若手研究人材・ ネットワーク育成補助金	人工知能を用いた肺高血圧症の非侵襲的 心機能診断支援技術の開発
リハビリテーション科学分野 教授 千見寺 貴子	公益財団法人 持田記念医学薬学振興財団	2023年度持田記念研究助成	シングルセルRNA-seq解析による老化 細胞を中心とした関節リウマチの病態解明

所属・職名・氏名	団体	名称	題目
リハビリテーション科学分野 教授 千見寺 貴子	公益財団法人 中富健康科学振興財団	令和5年度(第36回)研究 助成金	細胞老化システムに着眼した糖尿病に伴うサルコペニア病態形成と重症化機序の解明
リハビリテーション科学分野 准教授 長谷川 直哉	公益財団法人 伊藤医薬学術交流財団	海外学会等出席研究交流 助成	両眼視差および動眼視差が静的姿勢制御能力に与える影響の検討
リハビリテーション科学分野 講師 石田 知也	新潟医療福祉大学	2023年度新潟医療福祉大学 共同利用	アキレス腱の柔軟性は女性アスリートのジャンプ着地バイオメカニクスと関連するか～新たな膝前十字靭帯損傷予防アプローチの探索～
リハビリテーション科学分野 助教 越野 裕太	新潟医療福祉大学	2023年度新潟医療福祉大学 共同利用	足部・足関節の筋骨格系疾患による足関節背屈可動域制限の因子の検討
リハビリテーション科学分野 助教 越野 裕太	公益財団法人 石本記念デサントスポーツ 科学振興財団	第46回研究助成金	ジャンプ着地動作時のアキレス腱張力に 関係する足部三次元運動の解明
健康科学分野 助教 吉村 高明	公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団	2023年度研究助成奨励	超低投与線量 PET 検査を実現する Deep Learning 技術の確立
健康科学分野 助教 吉村 高明	公益財団法人 ノーステック財団	2023年度若手研究人材・ ネットワーク育成補助金	医療 AI を活用した前立腺癌に対する寡分割 Adaptive 陽子線治療技術開発
One-Health 推進部門 特任助教 Rahel Mesfin Ketema	公益財団法人 伊藤医薬学術交流財団	海外学会等出席研究交流 助成	子どものフタル酸エステル類代替化合物 DEHTP、DINCH、DEHA への曝露レベルと経年劣化

共同研究、受託研究、学術コンサルティングの受入状況 (令和6年2月時点)

所属・職名・氏名	件数	所属・職名・氏名	件数
基盤看護学分野 教授 矢野 理香	共同研究 2件	病態解析学分野 教授 山口 博之	共同研究 1件
基盤看護学分野 准教授 大槻 美佳	共同研究 2件	病態解析学分野 准教授 櫻井 俊宏	共同研究 2件
創成看護学分野 教授 蝦名 康彦	学術コンサル 1件	病態解析学分野 准教授 田村 彰吾	受託研究 2件
創成看護学分野 准教授 近藤 祥子	受託研究 1件	病態解析学分野 講師 大久保 寅彦	受託研究 1件
創成看護学分野 助教 コリー 紀代	共同研究 1件	リハビリテーション科学分野 教授 遠山 晴一	共同研究 2件
医用生体理工学分野 教授 石川 正純	共同研究 2件	リハビリテーション科学分野 教授 千見寺 貴子	共同研究 2件 受託研究 1件
医用生体理工学分野 准教授 杉森 博行	受託研究 1件	リハビリテーション科学分野 講師 高島 理沙	受託研究 1件
医用生体理工学分野 准教授 福永 久典	受託研究 1件	健康科学分野 教授 山内 太郎	受託研究 1件 学術コンサル 2件
病態解析学分野 教授 石津 明洋	共同研究 4件 学術コンサル 2件	健康科学分野 教授 小笠原 克彦	受託研究 1件
病態解析学分野 教授 恵 淑萍	共同研究 2件 受託研究 1件		

 受賞状況（令和5年10月～令和6年2月）

所属・職名・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文/演題名・研究題目・受賞理由等
修士課程1年 保健科学コース・リハビリテーション科学 平山 理花 2023.10.8	日本作業科学研究会第26回学術大会 最優秀演題賞	演題名:「企業戦士」の退職における作業的トランジションの葛藤経験-質的記述的研究
リハビリテーション科学分野 助教 岡 優一郎 2023.10.11	第9回北大・部局横断シンポジウム 研究助成採択銀賞	テーマ:脳出血後の運動療法による機能回復のメカニズムを3次元能イメージングによって解明する
健康科学分野 助教 吉村 高明 2023.10.11	第9回北大・部局横断シンポジウム 研究助成採択銅賞	テーマ:超解像深層学習を用いた低投与線量 PET 検査の実現に向けたシステム開発
創成看護学分野 助教 コリー 紀代 2023.10.11	第9回北大・部局横断シンポジウム 研究助成採択奨励賞	テーマ:ヘルスケア XR シミュレータに実装する匿名化生体情報の共有プロセスの効率化
健康科学分野 准教授 Bomme Gowda Siddabasave Gowda 2023.10.11	第9回北大・部局横断シンポジウム 研究助成採択奨励賞	テーマ: Exploration of small-leaf nettle for sphingomyelin synthase inhibitor to control fatty liver disease
医用生体理工学分野 講師 松谷 悠佑 2023.10.11	第9回北大・部局横断シンポジウム ベストポスター賞	テーマ:原子サイズで人体への放射線影響を予測する計算コードの開発
博士後期課程3年 看護学コース・看護科学 紺谷 一生 2023.10.20	第6回保健科学研究院国際シンポジウム DATE Award (優秀ポスター賞)	演題名: Factors Associated with Skin Barrier Dysfunction during Bed Baths in Hospitalized Older Adults
医用生体理工学分野 講師 松谷 悠佑 2023.11.10	日本保健物理学会第56回研究発表会 優秀口頭発表賞	演題名: ヒト由来水晶体上皮細胞での線量率効果
博士後期課程2年 看護学コース・看護科学 井筒 深紅 2023.11.11	第32回日本健康医学会総会 2023年度湖歩会藤原賞	演題名: 地域在住高齢者におけるフレイルに及ぼす嚥下機能の影響
博士後期課程3年 看護学コース・看護科学 紺谷 一生 2023.12.10	第43回日本看護科学学会学術集会 若手最優秀演題口頭発表賞	演題名: 連日の弱圧清拭がドライスキンを有する高齢患者の皮膚バリア機能回復に及ぼす影響
病態解析学分野 助教 村山 迪史 2023.12.17	画論 31st Best Image 優秀賞	症例名: 経胸壁三次元心エコー法による三尖弁逆流の重症度評価が治療効果判定に有用であった1例
修士課程2年 保健科学コース・健康科学 金野 諒太 2024.1.27	第22回日本医療情報学会北海道支部 学術大会 若手研究奨励賞	演題名: 特になし
博士後期課程3年 看護学コース・看護科学 紺谷 一生 2024.2.29	日本看護技術学会第21回学術集会 最優秀賞	演題名: 連日の弱圧清拭と通常圧清拭が高齢患者の皮膚バリア機能回復に及ぼす影響: A within-person randomized controlled trial

■ 人事異動（令和5年11月～令和6年3月）

●令和5年12月31日

（退職） 鈴木 哲平 データヘルスイノベーション分野（寄附分野）特任准教授
根本 英幸 生体応答制御医学分野（寄附分野）特任助教

●令和6年1月1日

（採用） 河嶋 亜衣 創成看護学分野 助教

●令和6年1月31日

（退職） 尾崎 倫孝 基盤看護学分野 教授

●令和6年3月31日

（退職） 平野 美千代 創成看護学分野 准教授

platys

広報誌の名称

「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな2本のプラタナスの樹があります。古代ギリシャの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシャ語で「広い」を意味する platys（プラテュス、ギリシャ語では「πλατύς」と記す）に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

プラテュス第32号 2024年3月

〈発行〉

北海道大学 大学院保健科学研究院 広報室
〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目

〈連絡先〉

医学系事務部 保健科学研究院事務課 庶務担当
電話 011-706-3315 E-mail shomu@hs.hokudai.ac.jp
ウェブサイト <https://www.hs.hokudai.ac.jp/>

